＼教えて、村上先生！／

周産期のこころのこと

信州大学医学部周産期のこころの医学講座の講師
村上寛先生による連載コーナー。
読者の皆さんから寄せられた相談に対して
村上先生が真摯に答えます。さて、今月のお悩みは？

今月のお悩み

親族や年長者の方から、「私のときに比べると今は楽ね！ 昔はこんなに大変だったのよ！」などと言われることがあり、何と返すのが良いのか悩みます。自分も否定されているような気持ちになってつらいときもあります。そういった言葉に傷付かない防衛法を知りたいです。　（松本市 /あんどーなっつ）

ご質問ありがとうございます。このような言葉には傷つきますよね。傷つかない防衛法になるかは分かりませんが、自分なりに考えをまとめてみようと思います。まず、そもそも昔がいつかは難しいところではありますが、今の妊産婦さんやお母さんたちの祖父母世代が子育てをしていた時代について考えてみます。

さかのぼること1960年代、世間では子どもは3歳までは常に家庭において母親の手で育てないと、その後の成長に悪影響が出るという「三歳児神話」が、さまざまな媒体において広がりを見せていました。更に1979年には、久徳重盛著『母原病－母親が原因でふえる子どもの異常』という書籍が出版され、当時大流行しました。

しかし、1980年代に入ると状況は大きく変わります。「男女雇用機会均等法」という法律が1985年に制定され、働く女性の数が急激に増加。働くためには、当然子どもを保育園に預けなくてはいけませんが、園の数は全く足りていませんでした。

このように1960年代～1980年代に子育てをされた母親たちは、世間から子育てに関する責任を押し付けられながら、「子育てをしながら働く」という新たな道を開拓しなければなりませんでした。しかし一方で、出生数は毎年150万人を常に超えていた時代で、いわばお隣さんが子育て中の家庭である可能性は今よりもはるかに高く、地域で自然に子育てを助け合う関係が構築されていた可能性が高まります。

話は現代に戻りますが、今、アパートやマンションに住みながら子育てをされていらっしゃる皆様の状況はどうでしょうか？ 昔に比べ、周りに子育て中の家庭は減少傾向にあると思います。

また、昔の母親たちは「女性が働く」というパラダイムシフト※を経験されましたが、現代の母親たちもまた違ったパラダイムシフトを経験されています。それは、「男性も子育てをする」です。これは一見、子育てに関して母親が楽になるように見えますが、現実は全くそうではありません。なぜならば夫婦・パートナー関係はそうシンプルなものではありません。どれだけ社会が男女平等育児を推進していても、個々の夫婦やパートナーを見てみると、大変な状況は千差万別。例えば、母親が父親にも育児をしてほしいと考えていてもしない、母親が育児に関する方針に関して父親と擦り合わせようと考えてもコミュニケーションがうまくいかない、あるいは父親が育児をしたくても担当している仕事が忙しく育児ができないなど、その悩みはさまざまです。

昔と今で、子育てに関する時代背景は全く異なります。また、昔であろうが今であろうが、それぞれの家庭においてそもそも状況は全く異なるので、「私のときに比べると今は楽ね！昔はこんなに大変だったのよ！」という言葉は成立しないはずです。従ってそのような言葉は、あまりお気になさらないことが一番。決してあなたの子育てが否定されることはありません。聞き流しながら、ご自身の子育てに向き合っていただければと思います。私も、自分の子育てを頑張ります。一緒に頑張りましょう！

※パラダイムシフト…それまで当然とされていた価値観が、根本的に変わること。

むらかみ ひろし
村上 寛 先生
1985年生まれ、
東京都出身。
信州大学医学部周産期のこころの医学講座医師。
三児の父。「周産期、全力を尽くします！」

村上寛先生の公式X
https://x.com/murakamishinshu

編集室では「周産期のこころのこと」に関わる質問を募集します。村上先生にお聞きしたいこと／掲載用住所（市町村名）とペンネームを編集室までお寄せください。